



~ 13
3362
14

3362
14

阿安永実録傳卷の拾四

阿安永実録傳卷の拾四

二十五
寶性堂
本卯共衛

阿安永実録傳卷の拾四

大正十年八月廿九
本大學出版部
贈

茶磯榮

目錄

- 一 佐々大石の四角形礼の形
- 一 佐々大石の四角形礼の形
- 一 佐々大石の四角形礼の形

とものまゝ

かたゝ

表意

学あらん

ともあじ

うけ

学者一如あり

のま

淡阿 安永 寒 福 傳 卷の拾四

依 友 大 專 門 士 別 園 和 云

勉 義 乃 乃 事

依 友 大 專 門 士 別 園 和 禮 の 祐 成

士 別 園 和 と 勉 義 事

去 福 一 款 依 友 大 專 門 士 別 園 和 事

お 福 一 款 依 友 大 專 門 士 別 園 和 事

依 友 大 專 門 士 別 園 和 事

依 友 大 專 門 士 別 園 和 事

かろしきもといは旧縁とてうらな草を
おろしき縁を解しりてはまきま
ま我作家もやすかんとてり
うらつきは任せ先出依の國と
長かりまより作縁を執りしと
いそきくらも世ある志くすの井乃因此
雖めて仕列ぬ族の足踏めてん六
いそけしとも是けしん政令の據是

八活山あまともなまれ和の及筋人馬
智心親ともも自他和すも毎世
そ時とて迎の印ん事のもおりあ
是も地よなす若縁をたたらぬ
十里平りも迎のひそく土依の國
是れかりともも安をいかに
ゆももしりれは是れむすすも
み所はては縁とて十所はては

芝原より名油とてげりたんの
ことと打録とる徳の事おしひ
あさすし書子のものとあひして
忙とゆきの府りり今更後悔す
ともせんさかく古今まのくさ
ちし移りてはなとるなり言ふ
てふたのここと打録のうつの如
らもし甲くあは河津の依の玉境園

取し花かりり今六張の園より押
そのりし色物 世系、松平お依成
分玉境の園より形を往來旅の乃
その切手何とさまの通す事お成
すと改りりまは依成大石島の御り尚
然しあひりせんともま 思ふと
思ひしとせしともさすり信所御知
りまは大石島よりあはる園系との事

しん歌を起す事もあるが
論は形くしくましく論を
里をかりて安んずる事
又一者しる病を治す事
かゝる形をいふ事
吾を小きやそりる業は
松平古依もその業の中
有てこそよく尋ねり
切手世

てハ國を治むる事
我を小きよとの者
河津もその業の中
便も河津もその業の中
集りし一つ度も
と物も人も物念を
何をも治まざるの
山分別もその業の中

出陣也世傳のまに中へ毎す事
りさらず鬼も南も北も討つぬ
なるまるといふく只事とさるる人
高人の攻め成つてや所人環まてけ
印く尋ねぬもの毎さそ中家
きらく破るを回創あもり人を推し
まてせしめやく出陣也毎るのま
るれは孝の足元舟我回ぬの事あれ

ハ吸礼とけり非人環まて出陣也と
戦ふと心一変して勇がらせ
く武士の事なまは六大小邪魔はい
くせんともましく大木の始末は高懸
せし孝ひらるる危く有合也 菰庭
と見えぬ 大木は右の菰庭はかく
えの武士は海はあしとあつたは
よそは戦はうと見えぬは是行はま

と喜するは内徳と申し是れ成りて
く無碍の由ありけりけりけりけり
氣まひあるまじとまじ右湯園知
らるるす切手の案文と志す大
ちのくもせり統へ依るおしき
しきころを交りけりけり

一阿別葛郡 百姓大石村の者

冊度里金巻語中印湯園不
滞古通しころの者送状
依一札如件

阿別葛郡村

百姓

大石村

安永之五年三月

日不存

五之書

まゝの愛拂ひのたしと申すは
大なることかゝの好意はしと申す
今めを遊ばずなりけりいせん心
ハ手物ト申す一且是は
高直の利と申すすまを
大木抄の関と申す事叶す
いせんと高直と申す事叶す
初信行の依るおれは事なる利と

す款持身ハ方おと落す
と申すその初身と申す事叶す
初身と申す事叶す
かゝり切手と申すおせは人
大なる身の息り目と申す
あやと申すは役人ト申す
高直と申す事叶す
口を舌と申す者ト申す

海をなすしりの夜合と由紀しり
りきぬの大右衛門と由紀しり
うせんと南無しりらまことしり
しり知るとまことしり事
えとおまのや川路合うと家傳
りりのき代の大少のまことしり
よ持来ぬの石の石めとまことしり
中へくとらぬとまことしり

七是あはく是返持来ぬ何とまことしり
世場の強弱はひりらとまことしり
りきぬと役人なりとまことしり
さりとて情家とまことしり
りきぬと子連是とまことしり
えと刀の大右衛門とまことしり
長光と房長と大右衛門とまことしり
しり強作とまことしり

以是六右左也 我未唯今 強混よは
かゝり 取柄の大小と 譽拂之余り
やすく ありき 今ふら 意ん 盡し
そと 早し とも くれも 具屋を 五
百文の外を 文と 割す 事の外す
善く ありき 別強の 尤右也 七是
六右の 尤右の 尤右の 尤右の
尤右の 尤右の 尤右の 尤右の

事也ひも あり 我も 作強の 圃
いり 那も まる けり 強作
常り 尤右の 尤右の 尤右の
まら 尤右の 尤右の 尤右の
尤右の 尤右の 尤右の 尤右の
尤右の 尤右の 尤右の 尤右の
尤右の 尤右の 尤右の 尤右の
尤右の 尤右の 尤右の 尤右の

三千女をかりの女にすゝ家の人おそ
ハ解し是より三層斗をぬのこ
時とちりぬハ人里のゆと音にれハ
大志の己れハ四曲順礼の者なるの
乃ハ醜迷ハ強きセリ何とぞ一息と
出能ハ何とぞ毎と終と終と終と終と
彼女房四曲順礼ハ何とぞ一知の事
ハ海生もお成下と終と終と終と終と

為し先ハ世方ハ耳のまじり中れハ
大志のちのよ終ハ内ハ入と終と
了終と終と内ハ終と終と終と終と
中も終と終と終と終と終と終と
中も終と終と終と終と終と終と
ハ何人形名ハ同ハれハ女房のいさく
了終と終と終と終と終と終と
りけりて終と終と終と終と終と終と

七物好めくしつ川そ好のたかり
んゆりしつはる如く好むは
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり
唯うなはてはるしそ女房のり

事ゆきまきしつ川そ好のたかり
三物とちりしつ川そ好のたかり
いひたれはた石つち大方は
幸ひくはるしつ川そ好のたかり
しつ川そ好のたかり
よんたつて書子とまきしつ川
の志ぎしつ川そ好のたかり
うらなふとまきしつ川そ好のたかり

敬く智教の命とるるも其の
東山くみ乃かすらん事覺るるを
進とおとくを我れも教生とお止す
るまゝの進とも印し是とるる家業
有し付り地取りの作りて田畑
らす精麻と打ちて海世といふ
と物に付しは其れおるは此物
ある進みはくは合りりし事なる

い明只地取の作りて精粉を我
る中身もそ精を村より彼
不あゆんとおるりたれ六たきつはく
く是とて時ておるらりきき
物とて見せむをぬせしむ
や此精を以りて出精粉よつ
ことなるひはるまじきや
まはるる一鬼せんとのひ

中のて 山道 浮地 の 是之 あり 幸ひら
 浮地 と なる して こと あり こと あり
 山 麓 の 傷 の こと あり あり あり
 と の ひ り 進 ん 大 ち り つ い 是 車 好 の なる
 ま さ 場 あり あり あり あり
 り あり あり あり あり あり あり
 大 ち り つ い 是 車 好 の なる
 り あり あり あり あり あり あり



岩 塚

岩 塚
 の 先 之 方

人 科
 の 方

中 傳
 の 方

鶴賀 考 之 の 鶴賀 考 之 時

